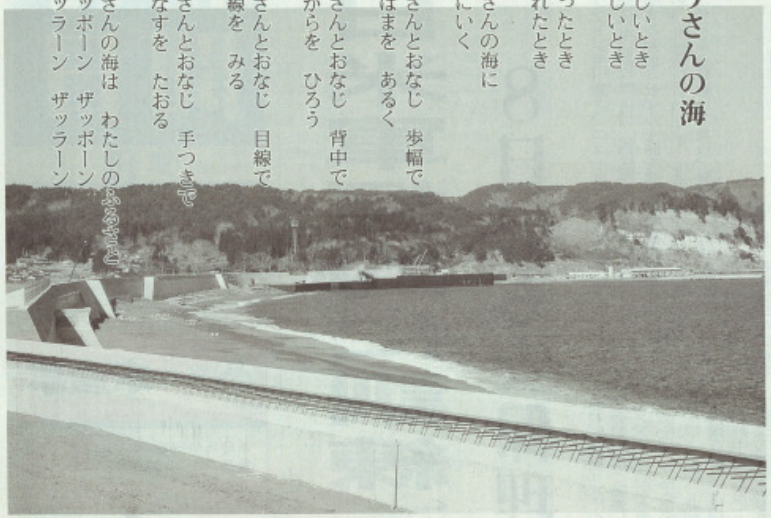
「特集ワイド」へご意見、ご感想を　t.yukan@mainichi.co.jp　ファクス 03-3212-0279

特集ワイド

6年書けなかった「海」

三陸の詩人に会いに行く

△さみしいとき、うれしいとき、まよったとき、つかれたとき、とうさんの海に会いにいく▽。そんな詩が昨夏、岩手県野田村出身で久慈市在住の詩人、宇部京子さん（65）から封書で届いた。震災前の故郷の海をつづった作品という。東日本大震災から6年、彼女はどんな思いで海を見つめてきたのだろう。詩に誘われ、三陸の海と詩人に会いに行った。【小国綾子、写真も】



震災前、宇部さんがよく散歩した十府ケ浦の砂浜は、ぐるりと海岸防潮堤に囲まれている。工事中で、まだ自由に歩けない＝岩手県野田村で2月28日

とうさんの海

さみしいとき
うれしいとき
まよったとき
つかれたとき
とうさんの海に
会いにいく

とうさんとおなじ　歩幅で
すなはまを　あるく
とうさんとおなじ　背中で
かいがらを　ひろう

とうさんとおなじ　目線で
水平線を　みる
とうさんとおなじ　手つきで
はまなすを　たおる

とうさんの海は　わたしのふるさと
ザッポーン　ザッポーン
ザッラーン　ザッラーン

野田港から十府ケ浦を指さす宇部京子さん＝岩手県野田村で2月27日

おわんのすまし汁を口に含んだら磯の香りが広がった。野田村の農家食堂「つきや」の定食。2年前、店を開いたかっぽう着姿の小野寺信子さん（68）は「海藻の香りがいいでしょ？」。

それより30分前、JR久慈駅まで車で迎えに来てくれた宇部さんから「どこに取材に行きたいですか」と質問された。「決めてないんです。宇部さんの好きな所に、ぜひ」と正直に答えたら、なぜか海ではなく、食堂に連れてこられたのだ。

震災前から野菜や豆、米を作ってきた小野寺さんは、震災後、ボランティアの大学生たちを民泊させるうち、手料理を褒められ、「若い人に声中を押されて食堂を開いちゃった」。しかも「野田村大学」の学長だ。バーチャルな「大学」で、支援を一方的に受けるだけでなく、逆に村人が〝教授〟になって漁業や農業、郷土料理など得意なことを教える側に回ろうと、昨年から始まったという。

まだ「あの日」は現在進行形です

「震災後、外からの支援者たちから刺激を受け、村では自由な発想が次々生まれ、どんどん面白くなってるの」と宇部さん。小野寺さんも「震災で多くを失ったけれど新しく生まれたものもたくさんあるの」。宇部さんはきっと、大津波で失われたものより先に、新たに生まれたものを見せようとしてくれたんだ。

次は、海。野田村の港へ。工事のための高い鉄板が海中に突き刺さる先に、景勝地、十府ケ浦の砂浜がかすかに見えた。地震による地盤沈下で砂浜は以前より狭くなった。

「痛々しいでしょ」。宇部さんの声が沈む。

宇部さんが30代の時に死んだ父の製材所が近くにあったから、浜は子ども時代の遊び場だった。紫色の小豆砂。ハマナスの群生。緩やかに美しい弧を描く3・5㌔の砂浜を歩けば、いつも亡き父に見守られている気がした。そんな思いを込め、震災の数年前、詩「とうさんの海」を書いた。

今、故郷の海では高さ14㍍の海岸防潮堤の工事が続き、砂浜にはまだ立ち入れない。砂浜を歩ける日が来ても、ハマナスの咲き乱れる浜辺が戻ってくるか分からない。

6年前のあの日、高さ15㍍以上の津波が村を襲い、37人が犠牲になった。11㌶以上あった黒松林もほとんどが流された。その日を境に宇部さんは海の詩を書けなくなった。

自覚するのに2年かかった。2013年春、ふと我に返った。「私は何か書いてきたっけ？」。大学ノートの隅々を探したが、言葉を書き付けた跡はない。詩を書くどころではなかった自分にようやく気づいた。

「私って『焼けたトタン屋根の上の猫』みたい。きゃんきゃん騒いで跳びはねて」と、この6年間を振り返る。支援物資の仕分け。被災した村の図書館を再建する手伝い。売り上げを寄付した約85000枚の手作り絵はがき。15年には、野田村保育所の園児全員が津波から無事避難し「奇跡の脱出」と呼ばれた実話を絵本「はなちゃんの　はやあるき　はやあるき」として出版した。

「家族も家も流されなかったんだから何かしなきゃ」と必死だった。詩を書こうと心から思えるようになるのに、結局、6年の年月が必要だった。

「まだ詩になってないけど」。震災2年後に書き留め始めた言葉を見せてくれた。△あたしはふるさとに通いつめて／なんだか　疲れちゃって／空を　仰いだら／白サギが　飛んでいた▽。やりきれない思いの切れ端が胸に痛かった。震災後の海に触れた言葉はほとんどなかった。

「人々が海を恐れ、うらんでいたから。私は大好きな海が悪者にされるのがたまらなかったけど。『海』と聞くだけでつらくなる人がいるのに、海の詩なんてもう書けるわけないと思ったんです」

「書けない」ことこそが、震災後の宇部さんの「海」だったのだ。「書けない海」の深さが胸に迫った。

「世間は震災5年を節目に風化が進むと言ったけど。まだ、あの日は現在進行形です」。詩人の声が胸にすとんと落ちてきた。

きっと歌は心の「アメっこ」なんだね

その日の夜は、宇部さんに連れられて合唱団「レクイエム・プロジェクト　北いわて」の練習へ。東京在住の作曲家でプロデューサーの上田益さんが、戦災や天災に遭った広島、長崎、神戸など全国7カ所で実施する合唱プロジェクトの一つだ。

人口4390人の野田村では、20人ほどの女声合唱「コールわさらび」が40年近く活動を続けてきた。震災で3分の2が被災し、知人や親戚を亡くし、自宅を流された人もいた。練習会場には車が流れ着き、ピアノは塩水で駄目になった。

会長の大澤和子さん（77）は「歌わなければ仲間がバラバラになってしまう」と7カ月後、練習を再開。最初はメンバーの自宅で。仮設住宅から通う人もいた。大澤さんはある日、「とうさんの海」など何編かの宇部さんの詩で合唱曲を書いた上田さんから「一緒に歌ってもらえませんか」と声を掛けられた。こうして始まったプロジェクトは14年に野田村の体育館で、それ以降も毎年、久慈市のホールでコンサートを開いている。久慈市などからの参加者も年々増え、今年は60人を超える。

練習の合間に「わさらび」のメンバーに尋ねてみた。津波の後に海の歌である「とうさんの海」を歌うのはつらくなかったですか？

その瞬間、あるお年寄りが腕に強くしがみついてきた。「最初はつらかった。私の家は海のすぐ近くにあったから。詩の風景は、失われた私の日常だったから」。女性の目が潤む。隣の一人が静かに口を開いた。「海のせいじゃないよー。津波のせい。私たちは海があるから暮らせる。アワビもウニも海の恵み。海を敵に回すのは、故郷を敵に回すのと同じだもん」

合唱曲「とうさんの海」を初めて練習したのは震災の翌年。皆で涙ながらに歌った。取り戻せない懐かしい風景が歌の中に生きていたから。その場に詩人として立ち会った宇部さんは「海の歌なんてもう歌ってもらえないかも」と恐れていたから、皆の歌声に心底救われた。その後、宇部さんは「わさらび」の仲間となり歌い始めた。

「音痴なのに」と恥じらいながら。

震災当時のことを、久慈市役所の職員だったプロジェクト事務局の東育子さん（64）が教えてくれた。震災直後、誰もが疲弊し、ギスギスしていた職場に菓子の差し入れがあった。「甘い物など腹の足しにもなりやしない」。ところが一口食べると心が溶けた。誰もが表情を和らげた。「歌はお菓子みたいなものなのかも。人の心を溶かすのねえ」

合唱練習に交じって一緒に歌っていたら、指導者の女性（37）がふいに、皆にこう呼びかけた。「一緒に歌えばもう仲間。新しい仲間の小国さんに、私たちの海の歌を聴いてもらいましょう。皆さんのそれぞれの思いを届けるつもりで歌ってください」

皆で「とうさんの歌」を歌ってくれた。一人一人の思いが音色になる。

△ザッポーン　ザッラーン▽

海の波音を歌う声は思いのほか静かで柔らかで、一瞬、震災前の平和な十府ケ浦の浜辺の風景が目の前にぱっと広がった。津波に多くを奪われてもなお、この人たちは波音をこんなに優しく歌うのか。これが海のそばで暮らす人たちの波の声なんだ……。

歌声の向こうに、ようやく詩人の「海」が見えた気がした。

（おことわり）「寝ても覚めても」は休みました。